水牛通信　毎月１回10日発行　1985年６月10日発行　通巻71号　1980年５月23日第三種郵便物認可

水牛通信

人はたがやす　水牛はたがやす　稲は音もなく育つ

へら師考　橋本陸男　2

植木職　高野健一　5

精神科医の手紙　相田信男　8

釣り　平野太呂　14

野の音コンサート北海道巡業日記　田川律　20

保育園　ひらのきみこ　22

対談　杉浦康平　平野甲賀　26

編集　平野甲賀

VOL.7 NO.6
毎月１回・10日発行
定価200 円

へら師考

橋本陸男

小咄をひとつ。あるへら師が釣りに出かけますと、おもわぬところに水色のいい小さな池があったので、早速竿を出して釣り始めました。そこへ通りかかったのが土地の農家の老人、しばらく釣りを見ていましたが「なに釣ってるんだね？」「へら鮒ですよ」「釣れるかねぇ」「いやぁ浮子がピクッとも動きません」「んだべさ、ここは先日の大雨で出来た水たまりだかんなぁ」

へら鮒という魚がいて、それを専門に釣る「へら師」という人たちがいます。今日はその「へら師」たちの生態について少々紹介したいと思います。

へら鮒は淡水に棲む鮒の一種で、これがなかなか釣れない魚でして……ですから、へら師たちはこれを如何に沢山釣ろうかと日夜腐心しているわけです。へら鮒がなかなか釣れない理由は多々あるのですが、それはさておいて、

ひと度この釣を覚えると、そのむずかしさというか、面白さというものは他に比べようもなく、ただ日々エキサイトが限りなく深まるばかりでして……少々か多少か多々か、今迄の生活や考え方も変ってまいります。

ひと口に釣りキチといいますが、このへら鮒に魅入られた「へら師」たちは、その度合が格別です。へら師は、眼覚めるとまず天気が気になります。雨が降っていると今日は釣れるぞと思い、風が強いと竿がふりにくいと顔をしかめ、一寸冷え込んだら、エサは何かと迷い、それがもう春夏秋冬、毎日でありまして、勿論へら釣りにオフ・シーズンは無いのです。

たとえば、地方へ出張した時です、車中から飛び去っていく川や沼、湖がついつい気になって思わず腰を浮かせて、ああ竿を持ってくるのだったと後悔したりするのです。はては先ほどの「水たまり」にさえも、もしやへらが……と思い込む次第でして……こういう状態になったへら師には「水てんかんへら猩紅熱」という立派な症状名さえつけられているのです。

今年正月三日、朝からどんよりと雲がたれ下っているにもかかわらず、まず釣り初めと池上線は長原にある釣堀小池に出かけました。案の定ちらちらと雪が舞いはじめ、うっすら白くなった桟橋には、私一人、足先も手先も感覚が無くなる程冷たくなっていましたが、魚信があるのでやめられません。その時、ふと二昔以前とところも同じこの釣堀のそばを通りかかって、やはり雪の中で竿を出していた釣人を見て、つぶやいた言葉が浮んできて思わず赤面してしまいました。「なにもこんな雪の日に釣りなんてするこたぁねえじゃねえか、大バカだねあの人は……」全く立場が逆転したわけでして、自分がその大バカになってしまったのです。

後天性へら痴呆症といわれてもしかたのないことです。これもそれもへら鮒がなかなか言う事をきいてくれない魚だからで……、その上、繊細な仕掛で水中から引き上げるまでの道中は、まさに恋焦れた女を口説き落した以上の充足感があります。またその魚体も実に優雅で美しく、その身のこなしもエロティックでさえあります。嗚呼！

それにしても「へら鮒」とは妙な名前ではありませんか。たいていの魚には、タコ・コイ・アユ・イワナ等々それらしい名がつけられています。へらとはいただけません、語感からはどうもたよりない魚を想像させますし、重ねて発音しますと、もうだらしなくてどうしようもありません。しかしへら鮒の体型は、淡水のタイといわれる程、体高のある立派な、みごとな魚なのです。民話でおなじみの、びわ湖のゲン

ゴロウ鮒が祖で、アユの稚魚を放流するときにまぎれこんで、全国に広まったと聞きます。形からもとは平鮒と書いたそうですが、この釣りをいち早く始めた大阪人特有のなまりでへらとなりました。へらとは何事ぞと異を唱えたくなりますが、しかし我事をふりかえっても、実はこれは魚につけられた名ではなく我々釣り人につけられた名前ではないのかと思えてくるのです。やれ一匹釣ったといっては、わぁわぁいい、大釣りしたとなるや、にやにやでれでれとなり、釣れなければ「おでこ、おでこ」と額を打たいてへらへらしている。「へら師！」自戒の意をこめても当然です。

あるへら師、ある年の春の乗っ込み時（産卵期）何んのせいか絶不調で、来る日も来る日もいい釣りが出来ません。明日は明日はで、釣りの合い間にちょこちょこと仕事をすませては、家にも帰らず釣り場に通い、あっという間に二十数日、やっとのことで夢の大釣りを果し、意気揚々わが家にもどると、ちょうど玄関を出て来る女房と小さい娘に、「何処へ？」「お風呂屋さんに行ってくるわ」「ふーん、たまにゃ銭湯もいいな」と気軽に笑って応え家で二人の帰りを待つことしばし、その銭湯のイヤ長いのなんの、その夜とうとう妻と娘は帰って来ず、三日目になって一通の速達が届いたそうです。中から出てきたのは奥さんの印鑑を押した離婚届だったそうです。それからというもの、そのへら師、「女房が銭湯へ行くといったら、速達が届く」と哀しそうにへらへらと語ったということです。へらへら……。

友部正人と豊田勇造の
タイ・キャラバン　出発コンサート
7月26日（金）・27日（土）夜6時30分開場 7時開演
ゲスト／26日：小室 等、27日：中山 ラビ、田島 征三
共通券：2000円……2日間どちらでも聴けます。
ペア券：3000円……1人で2日間聴くことができます。
会場：すぺーす・しょう中野 ☎03・389・0536
連絡先：キャラップ☎944・4051（昼） だったん☎341・8226（夜）

植木職

高野健一

庭先ではアジサイの花が咲き始めています。梅雨にアジサイというのも月並な話しで、恐縮ですが、アジサイのことについてお話ししましょうか。アジサイはご存じのように七色に花色が変るところから、花言葉が「移り気」とか「気まぐれ」とかいわれていますが、実際には、色の変化は土性（酸性度）に左右されるようです。酸性の強い土では、花色の赤紫が濃く表れ、中性に近い土では藍色が極だつそうで、いわばリトマス試験紙のような花なのです。しかし、最近は改良種が多いしハウスの促成栽培物が早くから出回りますし、季節感もあったもんじゃありません。白や赤紫、花色がそのままあまり変化しないなんてのもあります。となると，七変化ではなくなるわけですから、花言葉は変るのでしょうか。

季節は逆もどりしますが、今年の春

はアメリカハナミズキの咲きっぷりがことの他見事でした。桜の花が散ってがっかりしているところへ、パッと咲くのですから、なおさらです。アメリカハナミズキはその名の通り、古い外来種ですが、ここ数年、またたくまに広まったような気がします。確かに便利な木で、桜のように巨木にならないし、害虫もつきにくく、移植に強い、何よりも、枝振りの端正さが和洋いずれの建物にも合うといったところが、需要の増えた理由でしょうか。ところでハナミズキの仲間で、日本の山地、どこにでもみられる木に、ヤマボウシという木があります。花の形や樹形はハナミズキに似ていますが、やや黄味がかった白い小花は、楚々としてなかなか捨てがたい趣きがあります。が、庭ではめったに見かけません。

「徒然草」に「花はひとへなる、よし。吉野の花、左近の桜、皆一重にてこそあれ。八重桜は異様のものなり。いとこちたくねぢけたり」と書かれたように、中世の人はハデなものを嫌う心をもっていたようです。最近では庭木も外来種が多く、例えばツバキ。日本原産のヤブツバキやユキツバキより、交配を重ねた西洋種の方がもてはやされています。より華美に、より新奇にといったことでしょうか。

つねづね思っていることなのですが、日本の山地の雑木は造園材料としてもっと脚光を浴びてよいかと思います。すでに、ナナカマド、シャラノキ、コナラ、リョウブ、エゴノキ、ソロノキなどはよく使われています。もう二十年も前に、著名な造園家が、武蔵野気分を表現するためにこれらの木をとりあげたこともあって、関東の庭でも見ることがあります、ですが、他にもまだ魅力のある山地の木は多いのです。例えば、楊枝の材料になるクロモジ、カンボク、弓の材とされたマユミ、赤い果実のガマズミ、オトコヨウゾメ、ニワトコ、樹形の美しいトネリコ、紅葉の見事なヤマハゼなどなど、きりがありません。本州以南の落葉広葉樹地帯ならどこにでもある、普通の木なのですが、残念ながら、庭木としてお目にかかることはめったにありません。もっともこのうちどれかを御指名で捜すとなると、かえって手間暇がかかって単価も高くつきますし、やたらに掘り出せば自然破壊のそしりもまぬがれません。そうではなくて、パルプ材用林、ヒノキ植林など、無差別伐採しているものの一部を造園材料として、流通させることが出来ないかなあと思っているわけです。

さて、季節には必ず過ぎて行ってしまう面と、きっとまた来るという二つの面がありますが、そんな季節に寄りそうように仕事ができる「庭師」という職業は、やや人にうらやましがられるようです。今までにもよくそんな意味のことを言われたことがあります。そうでなくとも、やたら警戒心の強そうな門構えの家で、こちらもおそるおそる身構えながら裏木戸を入ると、意外や意外、あたたかい主人の眼差が待っているなんてこともよくあります。これは、やはり間に植物が入って、初めて成り立つ交流だからなのかもしれません。仕事や家族なんか忘れて、植木や庭についてだけ、しばし誰かと話しをしたいといった体のものなのでしょうか。そんな庭師の仕事を大ざっぱに分けてみますと、二つになるかと思います。一つは、造園、築庭の技術者としてです。めざす雰囲気の意匠を考え、ふさわしい樹木を選び、適所に配置して、一応の実現まで、こぎつける技術です。もう一つは「手入れ」を中心とした、庭の管理の技術です。こちらの方は床屋のようにも見られますが実際には医者に近いかと思います。庭師にも「医は算術」の手合がいないではありませんが、求められるのは、仁術の方です。病気を予防し、もし病気にかかれば直さねばなりません。枝を剪ったり形を整えたりするのは、人間の観賞のためというより、樹木の生理のためといった方が正しいのです。木を移植するのはさしずめ外科手術といったところです。手術後の養生には充分気をつかって水をたっぷりあげ、幹巻きや風除けをして回復をたすけてやらねばなりません。余談ですが移植というのは大変おもしろい仕事です。木の根鉢に沿って掘っていく時に、普段土中に潜っている部分が、少しずつ表れてきて、根の状態がすっかりむきだしになってきます。結果、なる程、木の地上部と地下部は、絶妙につり合いがとれていることが一目瞭然となる次第です。

昨今、植木や草花についての知識が雑誌やテレビなどで、豊かになり、その方面の技術が本屋に、あふれています。がどうもその割には、実際が伴わないのは、植物図鑑をみても、木のイメージがわかないようなものだと思います。知識よりも、実際にやってみる、失敗してみるというのが一番じゃないでしょうか、植物は生きものですから、結構手がかかるものです。面倒なことが苦手の方は、散歩しながら、よその家の庭を垣根ごしに見て、季節を御相伴するというのも一興です。

医者の不養生、我家には一本の木もありません。それでも裏山の新緑をみて、夏の近いことを感じています。

精神科医の手紙

相田信男

Mさんへ

久しぶりにお手紙をありがとう。

さて私が理解したところでは、今回のあなたからのご用件は次のようなものでした。

まず第一に、仮に「精神の病」をもったらしい人がいた場合に、〝その人自身〟はもちろんのことその人を取り巻く〝周囲の人々〟――多くの場合、〝家族〟――もまた、どうしたらいいのか分からないことが多いということ。しかもその際とくにご本人がそこに生じている事態の解決に積極的でない場合は、家族はますますどうしたらいいか困ってしまうこと。ところが第二に、そうした〝家族〟とは、どんな時にも〝困らせられる側〟つまり被害をこうむる側にいるとばかりは限らないらしいこと。ある場合には家族が安定した心持ちでご本人に対することで、問題解決の入口を見つけられることがあるのとちょうど逆に、ときには〝家族〟の方が、そうして生じている事態をより混乱させる原因とさえなっていると思える場合があること。そこで第三に、以上の件について、私の仕事の領域の一つである『家族ちりょう』の観点から述べることがあったら通信して欲しいこと。

以上の三点になるかと思います。

◇

そこで、私が〝精神「障害」をもった方〟や〝その家族〟と関わっていく際の一例として、ちょうどお手紙をいただいた今日の午後私がお会いした、ある患者さんとそのご家族とのやりとりについてお話しするところから始めてみたいと思います。

現在24歳の彼、T君は、「シンナー中毒」のために今まで数年間精神病院の入退院をくりかえしてきた青年で、最近は私が主治医をしている病棟に入院しています。従来「中毒だからシンナーを吸うんだ」と思っていたT君は、最近自分自身について次のような理解をもつようになり、近いうちに退院してふたたび家庭生活を送る予定になっています。彼の理解というのは、どうやら自分がシンナーを吸う原因はただ「中毒だから」なのではなく、ときに生じる「気分が落ち込むこと」と関係しているらしいというものです。こうした理解によって彼は、今後シンナーに手を出さないと決心しているのは勿論のこと、気分の問題をも精神科医の救けをかりて解決していくことを目指したいと考えていました。

他方、訪ねていらしたお父さんは、「家族の態勢が、以前の、Tなんか病院に入れておけばいいという考えからTを家へ引き取ろうというふうに変わってきた」と言います。

＊

こうした場合に、私が最初にやる仕事として、主として家族の中の誰の考えが変わったのか、お父さん自身はどう思っているのか、また同伴していらしたお母さんの意見はどうかなどといった点を、ひとつひとつ質問しながら明確にしていくという作業があります。ついで私は、T君自身が自分の考えを両親に話すように促しました。詳しいやりとりは省略しますが、やがて、T君自身の今後の方向についての考えは、一応ご両親に伝えることができたようでした。

私から見る限り、このご両親は当初「いい歳をしてシンナーを吸う」息子を持て余しておられるようでした。ただ私は、お母さんには何んとか彼の考えを聞こうという気持ちがある印象を受けましたので、彼女の発言を支持することに重点を置いて働きかけるように努めました。やがてご両親は彼を家に連れて帰り、再びともに暮らしてみようという気持ちを持って下さったようでした。

＊

以上のような、家族構成員の間のそれぞれの考えやときには感情を明確にしていくお手伝いが、家族同席面接の際の私の仕事の一つです。こうした援助によって、家族構成員個々の意見や感情が明らかになると、それぞれの違いがはっきりしていくことは勿論です。しかし同時にこの働きかけは、実はそうそう食い違っていなかった点や、折り合える点をさがすことをも目指しています。

先程の私の働きかけに即して言うと、いわば〝家族の中を通訳する〟仕事と言えるかも知れません。言うなれば、家族との同席面接を行う私たちの働きかけは、家族の中の〝関係性〟を明確にしていく過程、関係の調整、そして関係をつけ直す過程への援助を目指していると言えましょう。

＊

ところで、以上のT君と彼の家族とのやりとりを紹介する中から、今の内に私があなたに伝えたいもう一つのことがあります。それはお父さんが「以前の先生から聞いたんですが、この子は小さい時からのことが原因しているということですね」と言われた後で、お母さんがおっしゃったこんな言葉です。

「この子は小さい時から気が小さくて、なにしろこれの下が3人もいましてね、その子たちをおぶったり、手をひいて、買物に行くんです。この子と上の子を家に残して。すると泣くんですよ。けれども交通が危ないでしょう。だから家へ置いていったんですが、あれがいけなかったんでしょうかね」と。

◇

このへんで、私たち精神医療関係者たち――医師とは限りません――が、「精神の病」を理解するにあたって持っている、基本的文脈をご紹介しておいた方が良いと思います。

まず、「精神の病の状態」というのは心の中にある葛藤によって生じるという理解の仕方をします。そして〝生きている〟ということには必ず何んらかの葛藤がつきものなのだと考えます。ところがいつもは私たちは、これも何んらかのやり方によって、葛藤を処理しながら――ときには抑えつけながら――適応的生活を送っているのです。

そこで次に、「精神の病」は場合によっては誰にでも生じ得るのだという見解を持つにいたります。ここで言う〝場合〟というのは、周囲の環境からくるストレスを意味していることもありますし、当の本人の調子がいつもより低下している状況を指してもいます。

ちなみにこうした理解から派生して、ある一人の人にたまたま生じた「病の状態」は、その人を含む人々がおかれている周囲の状況を、ある先鋭化したかっこうで現しているという観点がでてきます。たとえば満員電車の中で、その状況に最も弱い人がまず最初に具合が悪くなるといった場合を考えていただいたら良いかと思います。（こういった観点から現代の家族が抱えている問題をとらえた書物として、小此木

啓吾著『家族のない家族の時代』ABC出版、があります。）

そこでさらにわれわれの理解は次のように進んでいきます。いまここに現れている「状態」の原因は、単にその〝個人〟に帰せるものではない、つまり「病の原因」を一人の「患者」という個人といった閉鎖されたシステムの中からだけでは捉えられないという認識です。そして、ある人と周囲、ある人とその他者との関係性の中にこそ、「精神の病」や現れている「状態」の因を捜し、解決の道を探ろうという方法への努力がでてきます。

こうした関係性の重視といった文脈から、幼児期の親子（とくに母子）関係に注目するひとつの立場が生まれてきます。

専門的に言うと、細かいところではさまざまな相違点があるのですが〝家族という問題〟に取り組もうとしている臨床家たちは、大体以上のような文脈で「精神の病」をとらえているとご理解いただいてよろしいと思います。

◇

ここで、先程のT君のお母さんの言葉に戻ってみましょう。彼女がやや悲しい思いを籠めて――きっと傷ついていたのだと思います――語った言葉の背後には、こんな事情があったのだろうと私は想像しています。

「精神の病の状態」の原因を個人の中にのみ求めるところから抜け出ようとする努力、あるいはいまここに生じている状態の起因するところを関係性の中にこそ捜そうとしていく臨床家の努力が、ときに家族の中にある種の誤解を生み、ある傷つきさえ生じてしまうことがあります。つまり、「悪いのはその患者さんという個人ではない」と語ることが、「悪いのは――あるいは原因は――家族なのだ」という〝専門家による診断〟として家族に伝わってしまう結果を生む危険性をはらんでいるわけです。T君のご両親の場合にも似たような結果が生じていたのだろうと思います。

＊

私が最近経験したもう一人の方の例で言うと、こんなことがありました。精神分裂病と診断されこの3年間入院していたKさんが、近く退院して家に帰ることになりました。そして前のT君の場合と同様ご両親に来ていただき、精神科ソーシャルワーカーを中心とした同席面接を持ったわけです。その席で社会復帰をめぐってご家族の協力を要請したところ、私たちはお母さんから、「この娘が病気になったのは、昔、

朝ご飯を作ってやらなかったからでしょうか」と聞かれました。

◇

「精神の病」の原因を、一人の「患者」と呼ばれる個人の中に捜していくのではなく、種々の〝関係性〟の中にこそ求めていこうとする、私（たち）の基本的立場はお分かりいただけたものと思います。しかしその際に、上述したようなさまざまな誤解やそれ故の傷つきを生じる危険性がはらまれていることもご理解いただけたと思います。つまり、家族における〝関係性〟をめぐって、その明確化や調整、さらに関係をつけ直すことを目指しての援助がときには〝責める・責められる関係〟として現れてしまうことさえあるわけです。そして、この辺りに私たちが抱えている臨床的難しさがあると言えます。

＊

そして、この種の〝関係の傷つけ〟をこそまず第一に避ける必要があるというのが、私の個人的見解の中心です。なぜなら関係が傷ついていく中で個人はさらに傷ついていくと考えるからです。

◇

ところで、あなたから問われた『家族りょうほう』をめぐって私が応えてきた以上の話は、実のところ、専門的にトレーニングされた『家族療法』についてではなく、私が精神医療のもっとも基本的認識だと考えている部分なのだとご理解いただきたいと思います。

勿論――と言わざるを得ないのが何とも残念なのではありますが――こうして関係性の中から「精神の病」をとらえるといった観点は、必ずしも全ての臨床医の認識とはなり得ていない現状にあります。

◇

あまりにも長過ぎる手紙にならないようにそろそろ初めの話に戻ることにしましょう。あなたがご自分の体験から感じておられた第一点と第二点はその通りだと思います。

では、「精神の病」で〝困った〟としたらどうしたら良いかという点について、考えてみます。答えは簡単で、ともかく遠慮なくどこかに相談に行くことです。それは保健所でもいいし、精神病院や精神科クリニックでもいいし、その他にいくつもあるはずです。ただこのことを心がけたら良いと思い

ます。つまり〝関係性〟の中からとらえようとしている専門家かそうでない「専門家」かという、〝専門家に対する診断〟をしてみることです。難しいこととは思いますが、「素人」同士の情報交換が意味をもってくるでしょう。

ところで、一般的にはなかなか「相談」に出向くことが難しいものです。次にその理由の一つを考えてみたいと思います。

私が紹介したT君はある特殊な例にみえたかも知れません。というのも、彼は「シンナー中毒」という明らかに〝悪いこと〟を原因として私たちと出会っているからです。T君のご両親の「困り方」の大部分はこの領域に属するものでした。しかもT君自身が、シンナーの問題を〝悪いこと〟というとらえ方から、〝心の動きとの関係〟として考えられるようになるまでには、ある種の変化が必要でした。

ところで、「精神の病」全体がT君の「シンナー」とほぼ同様な次元でとらえられていることがしばしばのように思います。

そうです。もしかすると私たちが、「精神の病」をめぐって、直ぐに色々「困って」しまうのは、そうした問題を〝悪いこと〟としてとらえてしまうからかも知れないのです。この事情については、私たち自身の〝こころのメカニズム〟について、さらに色々と考えていくことが必要なのでしょう。今回はこうして予告するだけにしておきましょうか。

◇

ところで最後に、このことを付け加えておきたいと思います。それは、以上の私の見解は、医学部の教育の中には無かった領域のことだということです。むしろ、実際の臨床経験の中から、つまり、同じ精神科医はもちろんですが、精神科ソーシャルワーカーとか看護婦とか心理臨床家といった医師以外の人々とのやりとりから学んだことが大部分です。とくに実際に患者さんとのやりとりによって、あるいはそのご家族の抱えておられる問題をともに考えていく経験を通して、ずいぶん多くのことを教わったと思います。

その意味で、前述したような「素人」の側からの〝専門家への診断〟が大切な意味をもってくるという、精神医療と人々との関係が今あるのだと強調して、久しぶりにあなたに宛てた手紙を終わりたいと思います。

さようなら

野の音コンサート

ヤギ牧場にて　六月二三

撮影　飯田照明

撮影　田川律

野の音コンサート北海道巡業日記

――――――――田川律

五月十九日。一行よりひと足先に、照明の黒尾芳昭さん、音響の新居章夫さんと帯広へ。すぐに会場へ。会場の帯広市民会館大会議室では、邦楽友の会とやらが練習中。五十人もの尺八と琴大合奏の中で会場を見る。新しいものへの好奇心まんまんの新居さん「こんな音楽のPAしてみたい」だって。

はじめ、現地の制作者、今回の受け入れ側総責任者の佐藤隆則さんと話してた時は、この会議室のマンナカをステージにと考えていたが、照明の設備の関係などもあって、すでにあるステージを使用することにきめる。

その夜はヤギ牧場へ。その名の通りヤギがたくさんいる元小学校だったところを改装した山小舎。素朴な作りの落着いた小舎。行く前に「何もないところだから」といわれて、黒尾さん少々心許なげに、ゴッシーこと五島富恭さんの家にあったテレビを借りて来たが、大自然の中ではどっか不似合いで滞在三日間の間、とうとう誰も一度もこのテレビのスイッチをひねらなかった。

二十日。朝から設営。椅子だけでなく前はゴザと座布団。そのゴザと座布団、葬儀社の公益社の提供。濃紺の地に白く公益社と染めぬいてあり、ほのかに線香の匂い。午後一行は元気に到着。空港から直ちに、ジンギスカン焼きのおいしい「白樺」へ寄ってからの会場への到着とか。リハーサル。

七時、本番。観客約百三十名。今回のぼくの役どころは、舞台監督。黒尾さんが親切（?）にも、会場のあかりを消したりつけたりする係と、途中でミラーボールを使うのを点滅する係を与えてくれた。以後ミラーボールは釧路、札幌ではなかったが、客電係はずっとやった。

公演プログラム。第一部　NOISE。プロローグ／こそあど／トランポリン／音読／ことばのリトミック／パピプペ／ひこうせん／都市／トロイメライ。約五十分。休憩十五分。第二部水牛楽団＋吉原すみれ。カブトムシの木のぼり／世界でいちばん大きな木のうた／クヌギ林――空／クヌギ林――夜／カブトムシの構造／カブトムシの幼虫時代／サルとユキとゴミのこども／とぶ／カブトムシの交尾／死／カチューシャの唄／ねむる／カブトムシの木のぼり。約四十分。終演は八時十分から二十分ぐらい。

両グループとも、おたがいの出番の時に相手のステージを見て、それぞれのレパートリーから好きなものを〝盗んで〟口ずさみ出す。水牛はNOISEの「こそあど」や「都市」を、NOISEは水牛の「サルとユキとゴミのこども」や「世界でいちばん――」を。札幌公演の頃には「いちど、レパートリーを取りかえっこする?」と冗談が飛び出すほど。

帯広は二日連続で同じ会場だったが二日目の昼に「高齢者学級」で同会場を使うとかで、いったん〝バラシ〟。この日、市民会館の方は稲垣潤一。ぼくたちのバラシが終って出てくると、出口に大勢の稲垣ファンがウロウロ。

ヤギ牧場では、「ふるさと十勝」の林みゑさんとゴッシーの連れ合い、五島典子さんが料理にケンメイ。ギョーザをはじめヨモギ入りイモダンゴ（?）まで、全員満足。

二十一日。朝はいつも、一番乗りは悠治さん。散歩、太極拳、そのほかとマメ。最後はいつも新居さん、と書くとかれおこるかな。全公演の記録写真をとっている「ふるさと十勝」の飯田さんの用意してきた釣り具で、ふたりで牧場の居住者腰山さんに教えられて裏の川、ナンチャラ別川で少し釣り。ニジマス一匹、オショロコマ（イワナ）一匹とる。昼に、如月さん、楫屋さんらとムニエルにして食べた。

この日、観客二百五十ぐらい。

二十二日。佐藤さん、新居さんと釧路へ先発。黒尾さんは札幌からきた照明ホリゾントアートのトラックで。釧路公民館は一階席のウシロが全面窓でそのまま外とつながる不思議なつくり。窓を開けておくとカモメでも入って来そう。観客百五十。

二十三日。バスで移動。期間中天候に恵まれ、この日も暑いほどの陽気。海岸線をひたすら走る。途中ラーメンがうまいとの「赤門」で休憩。全員、車中ではカワルガワル寝ている。夕刻「襟裳岬」へ。太平洋の彼方のアメリカは、この日も見えなかった。

一行は新冠泊り。ぼくは一足先に札幌へ入るため、列車と競争して、あやうく静内でつかまえ札幌へ。現場担当のハルオさんこと小室治夫さんと打ち合せ。この頃一行はユートピア・ロッジで、焼肉などしてくつろぐ。

二十四日。会場の大谷会館は、葬儀屋さんのビル（?）の五階。通夜の線香の匂いが全体に濃く漂う。この日は二百五十人。打ち上げは「二合半」泊りはノース・シティ・ホテル。なお、帯広最後の日、ヤギ牧場の持ち主、ランチョ「エルパソ」の平林さんの料理の豪華だったこと。手造りハム、ソーセージのうまさをたんのう。

二十五日。三々、五々解散。昼頃から待っていたように雨がパラパラと。佐藤さんはじめ現地の人たちにあらためて感謝。次は沖縄へ行きたい、だって？　カンニンや。

保育園

ひらのきみこ

桜の花の満開の頃、3歳になったばかりの末娘さくらは保育園に通い始めた。

4月4日　大雨の中、自転車に乗って保育園まで着くと、二人ともずぶぬれになってしまいました。今日は楽しい「お祝いの会」をありがとうございました。さくらは三番目の子どもですが、保育園に通うのはさくらが始めてです。どうぞよろしくお願いします。初めての日、緊張したのか帰ってから、おっぱいにくっついて、昼寝をしました。まだまだ赤ちゃんです。

4月8日　「お母さんは？」「帰りたい」など時々思い出して言っています。昼食のカレーライスを食べることを楽しみに色々おしゃべりしてくれました。

4月9日　昼寝の時間、ふとんに入ってお話しなど聞いていたものの寝つけず「おそとにいく！」「そとで遊ぶ！」といって起きてしまいました。六十人

近い子がホールで寝るので、抵抗があるのは無理ないと思います。はじめに保育園に対し嫌な印象をさくらちゃんが持たないように少しずつ慣れていってくれたらいいと思います。

4月9日　今日は私が不在で、お電話いただいたのに、迎えに行けなく申し訳ありませんでした。昼寝は、前から家でもしたことがないので、どうかなと思っていました。でも保育園はとても好きな様で先生お二人のこと、友達のこと、いろいろ話してくれます。けれどまだ保育園の生活に慣れていけないのかもしれません。私としては、今まで泣いて離れようともしなかったさくらが、保育園には喜んで行っているのが、不思議なくらいなのです。

4月12日　雨の日は特に狭い室内に子供も大人もみんないるので、遊びを見つけて夢中になる前に不安が先立ち泣くことが多かった一日でした。指人形ごっこでやっと立ちなおりました。お昼寝の前になると「おひるねはしない、ママに電話して！」と泣きだし、止まらないので、おんぶをすると寝入ってしまいました。ふとんにおろすと起きてしまいましたが、その後とてもご機嫌に遊んでいました。ならし保育は今日でおしまいとなります。月曜日から九時—四時です。

4月14日　大勢の子どもの中で、さくらちゃんはさくらちゃんなりに遊びを見つけ、遊び始められるといいのですが……。今日は皆と昼食を食べるのが嫌で、園長と二人で食べました。大勢の中というのは、かなりの騒音（ほとんど子どもの声ですが）おちつかないのでしょう。でも、それはご家庭で育ったお子さんにはあたりまえのことと思います。

4月16日　夜はよく寝ていましたが、朝起きると「保育園には行かない！」の連発。まだ長時間は無理なのでしょうか、両親とも自宅が仕事場ですので、どちらかは必ずおります。手に余った時は、お電話下さい。

この一週間、さくらは頑として家から動かない。何故か、あんなに好きだった銭湯にも行かなくなった。顔つきも、何んだか意地悪っぽい。困ったことになったと思いながら、延べ二週間保育園を休む。

今では十五歳になった長女、十二歳の長男も、当時は幼稚園に行きしぶった。その子その子で理由も違うし、世間との折り合いのつけ方もそれぞれだ。さくらの場合、三番目ということもあって、家以外の場所や人とのとけこみはスムーズの方だったが、保育園という単発ではなく毎日続く日常となると今ひとつ納得が必要だったようだ。二人で保育園の話しをしてみる。「ウサ

ギが居るんだって、今度、家の庭のハコベを持って行ってあげようよ」「ウン、でもさくらちゃん　ウサギ　どこにいるかしんないもん」「自転車があったでしょう、あれ、さくらが乗ってもいいんだよ」「でもさくらちゃん、かしてって言えないもん」「赤ちゃんいっぱい居ていいね。」「赤ちゃんにさわっていいの！」「いいとも」

私は保育園が好きだ。何よりも、保母さん達の子どもに対する態度、扱い方が教育者というより生活者に近いところがいい。大まかなスケジュールは決めてあるものの、後は、その日その日、子どもの顔色、元気さ、天気の具合に左右される。「お天気がいいから外へ遊びに行こう」という子どもがあれば何人か誘って小遠足にいく。子どもの側からの言葉で、遊びも、甘えも受け入れていっている。ヨチヨチ歩きの赤ん坊もいるし、歩けない子は前にだっこ背におんぶで園内を散歩している保母さんもいる。こんな光景は他にはない。さくらが行かないのなら、私が毎日行きたいくらいなとこだと言ってもいい。ところが、それが実際になってしまった。

5月1日　保母さん二人、来宅、いろいろ話し合った結果、しばらくお母さん同伴で登園する、しかもお昼までということになった。

5月7日　今日も半日一緒におりますが、よろしくお願いします。朝、「お母さんもずーっと一緒に居るよ」と言いましたら、安心しているようです。行ってしまえば、あんなに元気で遊んでいますのに、先生方や他の子どもには何とも気がかりな存在でしょうが、もうしばらく通わせて下さい。さくらが「お母さん、もう来ないで」と言う日がくると思います。

5月7日　さくらちゃんにもお母さんにも頑張ってもらいたいですね。

さくらと朝八時四十分に家をでて、十二時に家に着くまで、保育園の中では、ずっと立ちっぱなし。どんな仕事より疲れた十日間だったのに何とも楽しい毎日だった。ところが他の子ども達には納得がいかなかった様だった。いつも甘えたこともないのに、私を見ると泣いたり、パンツをはけなくなってしまった子。私の側でばかり遊んでいる子。明らかに反感を持って「おばさん何しに来てるの」「会社へ行かないの」と言ってくる子。（これはほとんど女の子）いつもと違う、違和感があったのでしょう。そろそろ引き上げ時だと感じたのです。何事も目立たず地道にやるのが私の身上でした。

5月13日　先週一週間は、本当にありがたい御配慮をいただき感謝しております。園の子ども達を混乱させてしまったようですが、おかげ様でさくらはとても落ち着いてきました。保育園の生活を一緒に共有することで、帰ってから話しが通じますし、保育園の人達や場所、様子など私にも知ってもらいたかったのかもしれません。ただ預けられてしまうのではなく、楽しい自分の場所として納得したかったのだと思います。

5月14日　今日の調子でお母さんが帰っていただけると良いと思います。とても機嫌よくしていました。

5月14日　帰ってからも、とても楽しそうにしていました。まだまだお昼までですが、うれしそうにしているのでこの分ならやっていけると思います。

5月15日　傘をさしてプールサイドを歩いたり、皆でマイクを使って歌ったりなどして楽しみ、お弁当を食べました。

5月23日　とても保育園を楽しみにするようになってきました。朝別れる時も、しがみつくといったこともなく、ちょっと抱っこすれば、お別れできるようになりました。お昼寝ができ、四時まで居られるようになるには、まだまだですが、気長に考えていきたいと思います。園長先生の所へ行って「私保育園が気に入ってるの」と言ったそうです。

5月28日　今日は散歩にいき「トントン！」「なんのおと？」「おばけのおとー！」という簡単な会話のあるおにごっこをとても楽しみに走りました。

5月29日　最近は、家に帰ってから、二日に一度は、昼寝をします。「保育園でも、だんだんできるようになるよ」と話し合っています。保母さんの事が大好きで、何をしてても「今頃先生はどこにいるの」と聞きます。

5月30日　とても元気で遊んでいます。お昼寝に入るときは、また抵抗があるかもしれませんが、あせらずやっていきましょう。

そろそろ十二時、さくらを迎えに行かなくては。十二時に帰るのはさくらだけなので目立たないよう、園に入るのだけどいつも二、三人の子どもにみつかってしまう。「どうして、さくらちゃん帰るの？　お家で何するの？」

対談

杉浦康平 平野甲賀

杉浦　だけど、文字にはそれ以前の長い歴史があって、たとえば江戸期の女文字なんていうのは、それこそイスラムのカリグラフィッ……ペルシャの詩を記したミニアチュアなんか見ると、水の波紋のようにしなやかな文字のかたまりが見えるけれども、ちょうどそれを筆の太さに変え、せせらぎを流れるような文字にして書き上げる、江戸の女文字の手紙文化っていうものがあるでしょう。あれなんかも字の極限にあるようなものだと思うのね。ところが、そういう過去の二〇〇〇年近い伝統にはなかなか目が届かずして、二〇年代、三〇年代がえりというのは、デザインやってる人がちょっと近視眼ぞろい過ぎるんじゃないかという気がする。われわれの文化のリズムそのものが、いま三〇年代をバネにしようとしているのはよく判るけれど、なにかもっと振幅があっていいような気するんだけどね。

平野　僕も、昭和初期の映画の文字とかそういうのを参考にしたり、いまだにそういう図案集みたいなものを持っていまして、ときどきのぞいて見たり、草書辞典みたいなもので字のくずし方をしらべたり……。

杉浦　それは一度捨てたほうがいいね。最近平凡社から出た白川静さんの『字統』という本は、甲骨文の発生から金石文字にいたる推移を見ながら、漢字のもとの意味はなんだったのかということを、白川さん流にまとめた白川学の集大成なんだけれども、それによると、漢字の発生の原点で、すでに文字たちがいかに多様な意味をはらみながら象形も同時にあわせ持っていたか、多様な象形がいかにたくみに文字化されていたか、その出発点の豊穣というものが非常によくわかる。

平野　そこまでやれたらおもしろいと思いますね。

杉浦　甲骨から金石までのあの推移なんかを重ね合わせていくと、モボ・モガ調味つけのいまの平野流書き文字も、もう少し揺らぎが出たり、漢字そのものが内包する霊力というか内力というか……。

平野　霊力というかな、そういうものは僕なりに込めるんですよね。

杉浦　平野君は身体力がありそうだから……。

平野　いちおう込めるんですがね。で、それをまた捨てたりなんかします。僕の場合は、いかに平凡にするかという努力をするんですけどね。あまりうまく書きたくないとか、そういうこともあるんです。

杉浦　平凡にする努力をするというのはどういうわけ？　生活そのものを写すとか、自然流になりたいとか……。

平野　そういうことでもないんですけどね。たとえば活字明朝体なんかは、長い時間をかけて普遍的なスタイルになっているはずなのに、僕には、えらくこわいものとして見えるんですよ。なにかこわいメッセージなんですよね。それをなんとかもう少し柔らかく――たとえば「翼」なんていう字でもずいこわそうなんで、僕が感じる「翼」っていうのはもう少し柔らかいとか、そういうようなものをやりたいわけですね。それと同時に、あまりに流麗な書き文字では、イメージを固定しすぎる。はたしてこれは何事なのかと、見た人に考えてもらいたいと思ったりして……。いま思いついたんだけど、民主的にしたいんです。

杉浦　なるほど。そういえば細明朝みたいなやつはあんまり使っていないね。それと活字体みたいなものとか楷書体みたいなものはあまり使わないね。

平野　そうですね。こわがりたいとき以外は。

杉浦　どっちかというと、太明朝の民かな使ったものが多い……。

平野　あれしかないですね。

杉浦　やっぱり、それぞれでき上がったものがその人の体型を写すのよね。

僕はいま、書体はだいたい遍歴してね、西洋料理もやればチェコ料理もやる、インドカレーも食うし、懐石料理も、ラーメンも食うというのと同じように一つの書体というよりは、ある書体の揺らぎの間を――字というのは揺らいでいるものだということを自分でも確認したいからそうするんだけどね。だけど、そういうふうに言っても、たとえばサインウェーブが上弦と下弦を持っているけど、真ん中にちゃんと一本平均化する軸があるみたいに、どこか吹きだまるところはあるんだね、表現の積重ねの中で。

平野　僕も、いろんな書体にいちおう手を出してみるんですけど、どうもあんまりピンとこないんですね。そうすると、民友社がなでいいやという、わりとあきらめの心境に近いですね。

杉浦　だけど、文字が攻撃的だっていうのは、白川さんの『字統』なんか見ると、やっぱり非常に攻撃的よね、文字は。決して平穏無事なものではないわけ。なぜかというと、文字は、発生のときから記録するものであって、なにを記録したかというと、たとえば天のお告げを記録したり、天変地変を記録したりという、ちょっと極端にいえば、すべてただならぬことにかかわりながら、形をなしていく。だから、それなりの神格性と事件性が必要なわけ。それから、文字を記す道具も、針のようなもので骨に刻むわけだから、鋭いものと固いものの出会いで火花が散るように形が刻印されて、生まれていったんだね。

平野　僕は、不思議と丸ゴチというのが好きなんですけれども、好きだっていうのは――見ていると、非常に恐ろしいですよ。なぜかというと、「目薬」とか「何々産婦人科」とか「新橋駅」とか、街で見かけた恐ろしいものというのは、ほとんど丸ゴチで書いてあったような気がするんですよ。

杉浦　ほう。丸ゴチなんか、平野君にとってはわりあい親和的な、近い存在かと思ったけれども。

平野　そうじゃなくて、かなり恐ろしいんですね。「立入禁止」なんて立札とか、そういうときのいちばん記憶に残っているサインは、わりと丸ゴチで書いてあったような気がするんです。そういう恐怖体験に通じるようなものが、どうも民友社がなんかにもあるみたいですね。こわいから使っちゃうという脅迫観念のようなものがある。

杉浦　そういう恐れが基盤になって

本のタイトルに書きつづけていた。すると、書名というものは非常に恐ろしいものだったわけ？

平野　そうなんですよ。僕にとって本というものは恐ろしいものだったんですよ。僕はきょうだいでいちばん下なんですが、そうすると、きょうだいの持っている本が、いずれ自分も持たなくちゃいけないものだという脅迫感になったり、それから、すごく勉強ができて、よく本を読んでいる友だちを連想させるとかね。本というのは、いつも恐ろしいものとして必ず部屋のどこかにあったんですね。だから、いやでいやでしょうがなくて、でも逃げきれずにそれをやっちゃうというところが多少あったんじゃないかという気がしますね。

杉浦　じゃ、フェティッシュの逆なわけね。サディスティックな状態で一五〇〇冊本をつくりつづけてきた。そうすると、最近の書き文字においてはそういう恐れはなくなって、調和的世界になってきたわけ？　僕なんか見ると、あの字のほうが恐ろしいけどね。

＊

杉浦　だけど、なぜ書き文字が必要なんだろうね。たとえば、原稿用紙の束がワッとくる。最近はワープロの束がきて、そこにすでに表紙がある。あとちょっとしっかりした裏打ちを表紙にして、そのまま出しゃいいじゃないか。こういうこともあるよね。

平野　ありますね。

杉浦　最近はむしろ、そういう考え方が積極的になって、ファックスで送られてきた原稿を、これはおもしろいやというんで、そのままやっちゃったりね。だけど、それではまたちょっと満足しないところがある。

平野君の場合に、できるだけ自然体というふうに言うときに、自然体なんだけれども、平野君というろ過器を通すと、こわい明朝体から書き文字になって、字が表情を持ちながら本の中に住みついて、著者の言おうとしてることをこっちに伝えるわけでしょう。どうして日本の場合、本というのは、本文に使っていた文字がそのまま拡大されて、題名や著者名に使われるだけでは済まないのか。題名しか書いていない本というのは非常に少ないしね。必ずなにか、ちょっと花びらがあったり、もっとひどい場合はカラー写真がごてごてあって、林真理子みたいな人が大口あいて笑っていて、その口の中にタイトルが入っている。そういうことに

なっちゃう。どうしてそういうふうに身振りを用い、もだえてくるのかね。

平野　芝居のポスターつくるでしょう。B全なんかでつくるわけですね。そうすると、あんなもの、東京の街どこにも貼るところないですよ。壁もなければ、そういう設備もない。どこに貼るんだといったら、自分の下宿の四畳半のふすまに無理して貼ったりなんかする。なんのために何色も使って苦労してポスターつくるのか。あるとき気がついたんだけど、あれは旗なんですね。芝居が始まる一か月ぐらい前にポスターができる。あれは内部に向けて振っている旗みたいなものなんですよ。つくって持っていくと、スタッフや役者が、あ、こういう芝居なの、っていうふうに思う。つまり、明らかに旗ふりみたいなものですね。で装丁もやや……この場合もう装丁とは言えませんね、カバーデザインというのは、ちょっと旗ふりみたいなところがあるんじゃないかと僕は思うわけですね。

杉浦　なるほど。

平野　基本的にはもう、真っ白でいいんですよ。タイトルだけで、こういうことはいっさい考えなくていいよというふうになってくれると気持ちがさわやかになるだろうと思うんですけどね。

杉浦　そのときはもう、「装丁家」という形にはならないね。

平野　そうですね。

＊

杉浦　さっき、書き手やつくり手、あるいは編集の人たちといっしょに暮らしているうちに、その人たちの底流が見えてくる、そこまでデザインするのを待ちたいというか、そこになって初めてデザインにかかれる、ということだったけれども、そうすると、そういう人たちの酒の飲み方とか、地声とか、そういう本音の部分も出てくる。底流におりればおりるほど、そういう個人のくさみ、自我のくさみみたいなものが出てくるでしょう。そういうものがぶんぶん出てくるようにはならない？

平野　そうはならないように努力します。ある基準に向かってみんなが動いているから、たとえば離婚した編集者とかそういう人がいたとしても、そういう個人のどろどろしたものがその基準にはね返ったら、すごく恐ろしいことになっちゃうというふうに思いますしね。まず本のあるべき理想みたいなもの、いちおうそういうものがあって、だからそれを共通に持つために――しかし編集者の言葉を聞いて本を装丁すると言ったけれども、やはりそれだけじゃ信用できないというところもあるんですよね。だから、何人か決まった顔ぶれの中に自分も一枚入っていって、この顔ぶれがいったい何を考えて出したいのかということを、自分でも体験しないとかかわれない、ということでしょうかね……。

杉浦　そうすると、とことん飲んだりしゃべったりしたあとで、みんなくたびれた、ともかく寝ようかっていうことになるんだけど、ちょっとその前に風呂にでも入ろうよとか言って、銭湯に出かけたり、温泉場なんかだと大きな湯舟につかっちゃう。そうすると、みんなお互いにある目的に向かって地金を出し合っていた人たちだけれども、その目的のまま、さらに湯っていう快適空間を身につけて、お互いの目的を融和的に高め合うっていうか、そんなような状態が平野君の理想なわけだ。だから、「平野温泉」なわけだな。

平野　まあそういうことでしょうかね。

杉浦　だから、たぶん平野君のデザインは、湯気ごしにほかほかしながら眺めるという風情なんだよ。つぎは背中を流しっこしようとか。だから、いい意味での個性を調和させるというか……。

平野　そういう意味じゃ、そういうところに姿をくらましたほうが楽だということもあるし、基本的にちょっと姿をくらましたいなというのがあるんですよね。あるんだけれども、つい出しゃばっちゃう。やっぱりこれは、文字に対する恐ろしさみたいなものが、つい腰を浮かせてしまうのです。

杉浦　一連の書き文字なんかも、くもりガラスごしに眺めると、明朝活字に見えちゃったりするかもしれないよ。くもりガラスごしに平野君の本を見ると明朝体の大きい字で書いてあるように見えるけれども、ガラス戸をあけてみると、平野君のあの字で、著者の地声まで聞こえてくる、というふうなことなんだろうね。それでだんだん読み終わった状態に近づいてゆくわけだ。

平野　さめてきて……。だんだん枯れすすきみたいに見えてきて、最後になんにもなくていいや、と。

『平野甲賀装丁の本』より転載

水牛通信　毎月1回10日発行　1985年6月10日発行　通巻71号　1980年5月23日第三種郵便物認可

編集後記

今月の筆者紹介。橋本陸男さんはコマーシャル・フィルムの演出家、人間味のあるドラマ仕立のものが得意とか、知らぬ間に我々も何本かは彼の作品を見ているはず。へら師歴五年、女房に逃げられたってのは彼のことではありません、念のため。髙野健一さんは、僕の借家の大家さんの庭に出入の若き植木屋さん、いや造園芸術とかランドスケーパーとか自称しているのでした。相田信男さんは、これまた若き精神科医。医学教育課程では得られなかった新しい治療分野で活躍。頼もしいかぎりです。ひらのきみこさんは、お母さん。保育園に入ることで、とにかく初めて社会というものに直面するのだから、子どもも大変なわけだ。

なんとなく三十二頁ぐらい埋まるものと思っていたら、そうは問屋が下さない。田川律さんの北海道公演記録と写真、帯広の飯田さんの写真にも応援してもらって、はじめて成るのでありました。次号はどうなるのかな？

（平野甲賀）

ミニコミ自主出版物取扱書店
模索舎
〈月曜定休日〉　営業時間11時～19時
東京都新宿区新宿2－4－9
Tel. 03－352－3557
模索舎年鑑
'84
700円
（〒200円）
新宿駅
明治通り
新宿3丁目
ランボンペス
新宿御苑
新宿御苑前
伊丹
協和BK

＊**予約講読**の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。
口座名　水牛編集委員会
口座番号　東京四－九一七九二
購読料　一年分三〇〇〇円（送料共）
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

＊本誌は次の書店にあります。
模索舎（新宿）☎三五二－三五五七
ブックイン（阿佐谷）☎三三〇－七八九七
信愛書店（西荻窪）☎三三三－四九六一
ワンラブブックス（下北沢）☎四一一－八三〇二
アール・ヴィヴァン（西武池袋店12F）
カンカンポア（西武渋谷店B館B1）
ストアデイズ（六本木ウェイブ4F）
名古屋ウニタ書店　☎七三一－一三八〇

水牛通信　第七巻第六号　一九八五年六月十日　定価二〇〇円　発行人＝堀田正彦　発行所＝水牛編集委員会　〒154
東京都世田谷区新町2－15－3八巻方
電話〇三（四二五）九六五八　振替口座東京四－九一七九二　印刷所＝㈱トライプリントショップ